巻頭言

武市春男

故蒔田栄一先生のご高名は，わたくしも早くからいろいろな関係で承っていた。しかし，最初の出合いは，昭和39年5月のある日，城西大学創立事務打合せの席上であった。

小柄で，白髪まじりの頭髪を無雑作にはしているが，洋服の縞は上品の上に，その着こなしはスマートで，洗練されたマナーのこの紳士が，蒔田先生かと，なんとなく親しみを覚えたと同時に，キビキビしていて山椒は小粒でもピリ辛いといった毅然たる態度も感じられ，近付き難い御仁ではないだろうか，とも思った。殊に，私費をもって専門の英語，英文学の研究のため，英米に渡り，帰朝早々の時で，これから生れようとする大学への建設的意見を伺うに及んでは，なお更のことであった。

ところが，会議が終って食事の際，お酒が出て，銘々の気分が和らぐと，先生は小唄を低唱した。のみならず，傍のわたくしが原籍が土佐であるという，因縁があったからであろうか，土佐の佳人のエピソードを細々と物語ってくれたのである。

人々の交際などというものは，正座してお茶を啜り，鹿爪らしく，「左様，しからば」などと言い合うのみで，腹の底を見せない限り，何年経っても親交が深まるものではない。根が単純で正直のわたくしは，先生の率直なお話にスッカリ共鳴して，二人でなにを話し合ったか，いまは忘れてしまったが，ともかく，腹の底をお互いにさらけ出して，この人こそと信じ合い，爾来，肝胆相照らす仲となって，先生御在世中続いた次第である。

先生とお付き合いしているうちに気付いたことであるが，先生は気が勝っているけれども，身体は余りご丈夫ではなく，先生の精神力で身体を支えていら

れるようにも感じた。一緒に会食してもきわめて小食で，ビールは精々コップ1杯位しかお飲みにならず，それでいて付き合いは良く，お誘いすれば否といわれたことがなかった。また，先生自らもわたくしによく声をかけて下さって，プロレス，角力または帝国ホテルの三浦布美子ショウなどへ行ったことがある。その帰りには大抵有名な食べ物屋へ案内されるのが嬉しく，また，田舎者のわたくしは，その都度見聞を広めることができて楽しかった。

このような，私的な交友のみならず，公的な角度から見た，先生は，古武士的の文化人であり，学者であるとともに教育家であった。また，歌人でもあり，詩人でもあって，さらに付け加えると，清潔な粋人でもあり，人情家でもあった。なお，勝気な潔癖家でもあったから，多少直情径行的な面もお有りのようであったが，それがまた，先生の面目を躍如たらしめて，人物を一段と高揚させたともいい得よう。また，先生は誠実な方で，友情に篤くわたくしがその友情に感激した一場面を語り度いけれども，私事にわたるから省略しよう。

先生のお人柄を描写するには，以上の言葉だけでは不充分である。意余って言葉不足であることは，わたくし自らが誰よりも承知しているが，このような立派な先生を城西大学経済学部のメンバーから失ってしまって，頭に大きな空洞が生じたような感じで，モウこれ以上，筆の進まないのが残念である。

幸いにも，わたくしと同じ気持の同僚各位の協力によって，本学部経済学会誌は，先生の追悼号を世に問い，もって，先生の徳を偲び，その霊を慰めようと企図している。この企ては洵に時宜を得たものというべく，担当委員のご労苦もさることながら会員各位に対して感謝する次第である。

投稿の珠玉は，いろいろな都合で割愛したものもあったと聞いているが，それは紙面の制限などに拠るものであるらしく，登載された10篇の論文は，悉く先生を偲びながら，ときに紙上に涙を落しつつ書き綴ったものであろうことを推測して，高く評価すると同時に玆に改めて敬意を表する。

乞われる儘に，蕪辞を述べて，その責をふさぐ所以も亦ここにある。

昭和49年11月22日